

## クライアントの周囲にあるものとは何か

—道具・事物・他者—

○ 文京学院大学 田嶋 英行 (04929)

キーワード：環境・実存・存在論

### 1. 研究目的

ソーシャルワークはそもそも、クライアントがその環境と相互に影響し合う接点に介入していく。それはすなわち、クライアントとその環境の双方に、同時に焦点を当てていくということである。かつて Mary Richmond はクライアントを支援していく際に、「ひとと環境の間の相互作用」(Cornell 2006: 50) を強調した。「環境のなかのひと (person-in-environment)」もしくは「状況のなかのひと (person-in-situation)」という概念は、「ソーシャルワークの開始期に生じたもの」(ibid) として捉えられ得るのであり、ソーシャルワークにおける伝統として受け継がれ今日にいたっている。

ただし今日のソーシャルワークにおける「環境」の概念は、有機体一般を対象とする生態学 (ecology) の考えをもとにしたものとなっている。しかしながらクライアントはあくまで人間であり、有機体一般とは根本的に異なったあり方をしている。あくまで実存 (Existenz) として、「自分の存在することへ向かって自分に関わらせつつ存在する」(茅野 1968: 93) ののである。これは人間に「固有」(同前) な存在のあり方なのであり、クライアントがさまざまな生活課題を抱えることによって悩み、そして苦しむのは、ひとえに彼ら自身が自らあること (存在すること) へ向かって自分に関わらせつつ存在するからに他ならない。したがってこれまでソーシャルワークが受け継いできた「環境のなかのひと」という概念についても、ひとが実存としてそのように存在している限り、環境という概念もそのことを前提に捉えていくことが求められてくることになる。ここではソーシャルワークにおいてクライアントが実存として存在していることを前提に、その環境について、すなわち彼らの周囲に、そもそも具体的に何があるのかについて検討をおこなっていく。

### 2. 研究の視点および方法

人間が実存として存在することを存在論的に分析した Martin Heidegger による実存論的分析論 (Die existenzielle Analytik) をもとに、ソーシャルワークにおける「環境」の概念の検討をおこなっていく。なおここでいう存在論とはすなわち、そもそもものが存在するとは何か、という根本問題を研究するものであり、この実存論的分析論は人間という存在者が実存として存在することが何かを追究するものである。

### 3. 倫理的配慮

本研究は関連文献を用いた文献研究ではあるが、日本社会福祉学会研究倫理指針に則ったものであり、倫理的にはとくに問題がない。

#### 4. 研究結果

クライアントにおける「環境」は、さまざまなものと他者によって構成されている。それでは実存として存在する人間にとって、ものや他者があるとはそもそもどういうことであろうか。人間は実存として存在すると同時に、「世界=内=存在 (In-der-Welt-sein)」(Heidegger=2003: 136)として存在している。ただしこの「世界」とは、何らかのものの集合体として規定し得るものではないものの、実際のところはおそらくそれがもの自体を「はなはだしく規定」(前掲: 189)している。クライアントにおける「環境」を構成するものや他者は、ともにこの「世界」によって規定されることになるのである。

ソーシャルワークにおいては、クライアントは、その環境のなかにあるものとしてみていくが、そもそもそのようなあり方に彼らがあり得るのは、彼らが実存としてかつ「世界=内=存在」として存在しており、かつその「世界」のうちで「交渉」(前掲: 173)できるからである。具体的には「配慮的気遣い」(同前)によって露わとなる道具的存在者が、もしくはその欠如態としての事物的存在者が、さらには「顧慮的な気遣い」(前掲: 313)によって露わとなる「相互共存在」(前掲: 322)が、彼らの周囲に存在するのである。

#### 5. 考察

ソーシャルワークは、あくまで実存として存在するクライアントを対象に援助を展開していくのであり、したがってその「環境」についても当然のことながら、彼ら自身がある(存在する)ことを前提に検討していくことが求められる。前述の通り現在のソーシャルワークにおける環境は、あくまで生態学という隣接諸科学の1つをもとに捉えている。しかし生態学は、あくまで有機体一般を対象にしている。一方のソーシャルワークは、実存としてすなわち「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在する」クライアントを対象にする。したがってその環境についても、クライアントがそのような存在することを前提に、それについての理解の仕方を見直していくことが求められる。そして実際には、それには道具存在者・事物的存在者・他者の3者があることが明らかとなる。

これからのソーシャルワークにおいては、いささか使い古された感のある「クライアントのいる(ある)ところから始めよう (Start where the client is)」という原点に戻り、すなわちクライアントがある (be) ということから、これまで受け継いできた伝統を、つまり「環境のなかのひと」(もしくは「状況のなかのひと」)という概念を、もう一度検討していくことが求められるのではないであろうか。

(引用文献一覧)

Cornell K. (2006) Person-In-Situation: History, Theory, and New Directions for Social Work Practice, *Praxis*, Fall, vol.6.

Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. (=2003, 原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間 I』中央公論新社.)

茅野良男 (1968)『実存主義入門 - 新しい生き方を求めて -』講談社.